

テレビと生活

38期生

I テーマ設定の理由

現在、日本のテレビの普及率は98.9%にも達している。この98.9%という数字は何を意味し、私達の生活にどのような関係があるか調べてみたかった。また、テレビについていろいろな人々が意見を述べているが、自分もテレビについて調べてみるとことによって自分自身の意見を持ちたいと思っている。そして、それによってテレビに対する見方を検討してみたいと思ったからである。

II 研究方法・計画

主に文献を調べて考察をする。

調べていくもの。

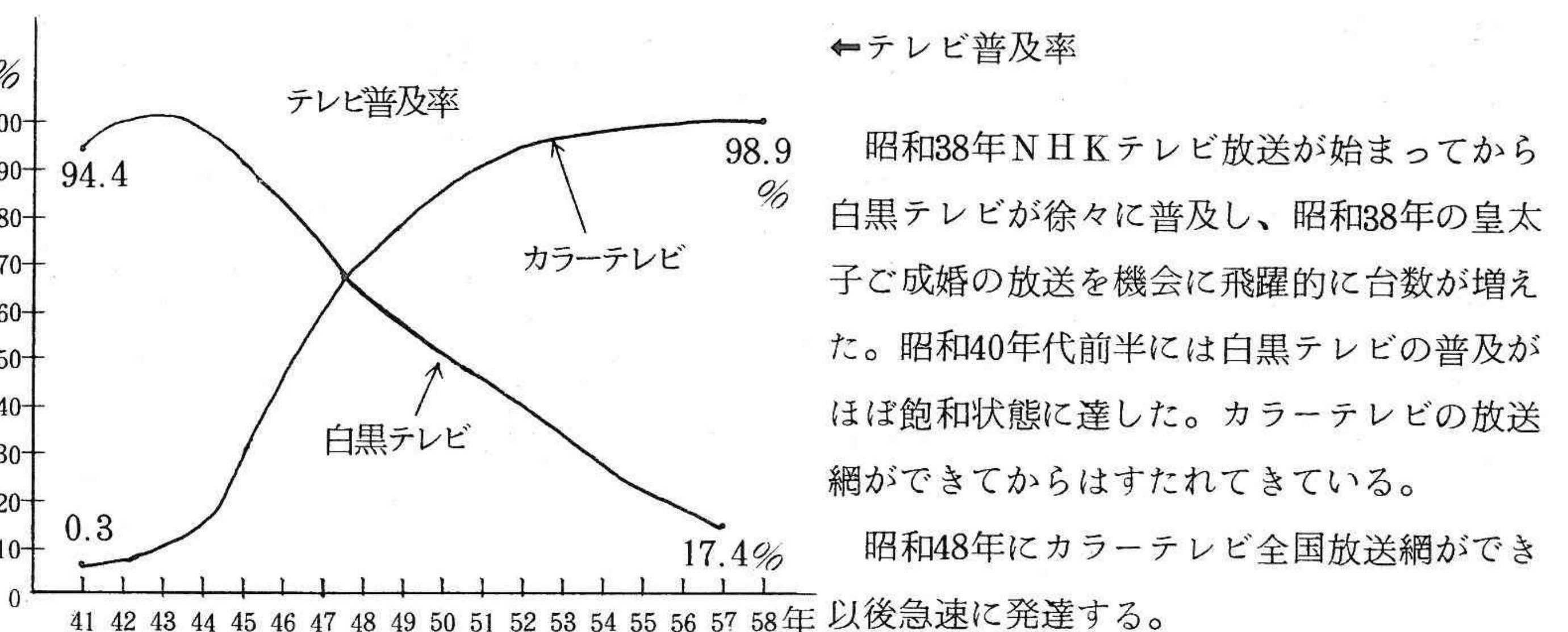
1. テレビの歴史
2. テレビの種類
3. 普及について（白黒からカラーへ）
4. 年令別のテレビとの接触
5. テレビの生活への影響力とテレビ観
6. テレビ番組の必要性 | 地域への情報
7. これからテレビはいかなるものになるか
8. まとめ
9. 反省・感想

注) 紙面の都合により、1. 2.

6番は省きます。

III 研究内容

(3) 普及について。（白黒からカラーへ）



～感想～

グラフから考えると、私達の生まれたときからカラーテレビ時代に突入していた訳でテレビの歴史の浅さから、私達の生きている年数の短いことがよく分かる。昔、我が家にも白黒テレビがあったことをよく覚えているが、その思い出の中で一番頭に残っているものがある。それは料理番組だ。アナウンサーが「きれいですねえ。」とか「おいしいですねえ。」とかいって話を聞いたけれど、自分が見るのは黒と白と灰色だけ。とてもいやな思いをしたことを覚えている。

しかし、それにしても大変な普及率である。これほど生活に密着したものは外に類がないのではないかと思われる。（但し、電気製品で）

<他の資料から>

テレビの普及過程は中央から地方へ、高所得層から低所得層へと拡がっていった。

—テレビ受信機の普及した理由—

日本経済の高度成長、それにともなう国民所得の増加、生活様式、生活意識の急激な変化。受信機販売価格の大幅な低下。最も面白いことは、当時、電気洗濯機、冷蔵庫、掃除機といった家庭電化製品よりも、テレビが優先的に選択されたことである。

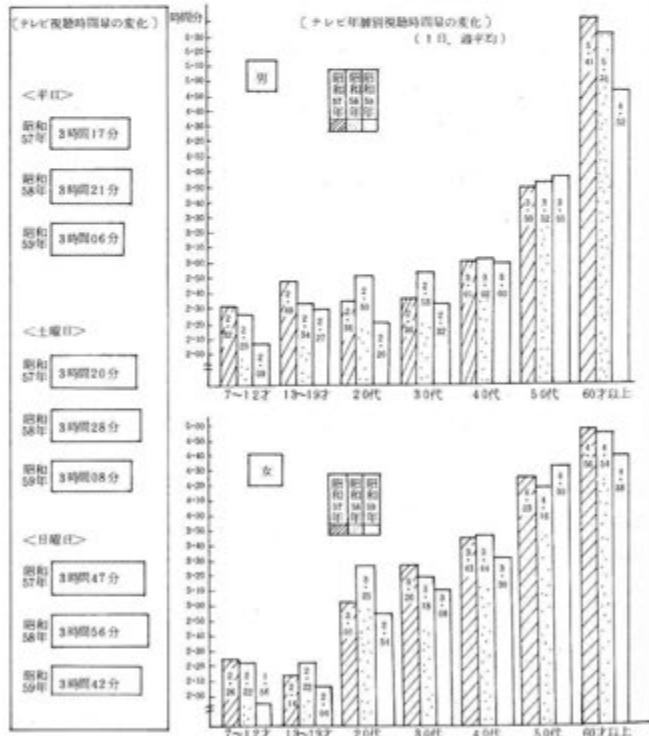
(4) 年令別のテレビとの接触率

昭和50年代に入ってから全体に漸減の傾向が続いている。漸減傾向は男女共に20代以下の層と60才以上の層に目立つ。しかし1週間の中で1回でもテレビを見た人の率は97%と高い。→日常生活の一部といえる。

テレビ年層別視聴者時間量の変化の昭和59年度を主に調べる。

調べる内容

- ①テレビを見ることのできる時間。
- ②男女平均のテレビ視聴時間。
- ③テレビを見ることのできる時間に対するテレビを見ている時間の割合。



	7~12才	13~19才	20代	30代	40代	50代	60才以上
①	6.5 時間	6.0	5.0	5.0	5.0	5.0	16.0
②	2.07	2.27	2.62	2.83	3.25	4.21	4.75
③	31.8%	37.8%	52.4%	56.6%	65.0%	84.2%	29.7%

考察

やはり、年を取るにつれてテレビを見ている時間が長くなる。しかし、60才以上になると意外にもテレビを見ている割合が少ない。ということは周りの人から「テレビばかり見るのは体に悪い」といわれるので、他にも趣味を持っているのではないかと思われる。最近は、スポーツが盛んに行われるようになってきているので、テレビばなれが起こっているとも考えられる。

驚いたことには、小学生（7~12才）より、中学・高校生の方がテレビを見ている割合が高い。小学生の場合は、親の注意を多くうけるため、少なくなるのではないか。また、「おけいこごと」もあるためではないだろうか。

40・50才代はいつもテレビを見ていないと気がすまない心境になっているのではないかと思う。

小学生の割合が意外にも低いが、これはよく学び（塾）よく遊び（戸外）の傾向が、よく表されている。

(5) テレビの生活への影響力とテレビ観

表1、2から16才以上の国民の80%がテレビは「政治や社会に対する考え方方に影響を与えた」といっており、85%の人々が「人々や社会、国によってさまざまな考え方や生き方があることを分からせた」としている。

表3から人々の生活内容を「個性あるものにした」「同じようなものにした」「テレビとは関係ない」という3つの選択肢の中から選ぶ。結果、「個性あるものにした」が24%、「同じようなものにした」が43%、「テレビとは関係ない」が21%である。

表1. テレビは人々の政治や社会に対する考え方方に……	どちらともいえない	わからない
影響を与えた	80 %	9 6 4
表2. テレビは人々や社会、国によってさまざまな考え方や生き方があることを分からせた。	どちらともいえない	わからない
そう思う	85 %	9 4 3
表3. テレビは人々の生活内容を……	どちらともいえない	わからない
個性あるものにした	24 %	43 21 7 5
同じようなものにした	43	
テレビとは関係ない	21	7 5
表4. テレビは団らんの身中を……	どちらともいえない	わからない
元気させて	36 %	22 34 6 8
団らん	22	
テレビとは関係ない	34	6 8
表5. 人前で話したり、歌ったりすることに慣れさせた。	どちらともいえない	わからない
そう思う	61 %	28.6 8 2.3
表6. その場に応じて、団のよりかえのできる人を増やした。	どちらともいえない	わからない
そう思う	39.4 %	42.6 11.9 6

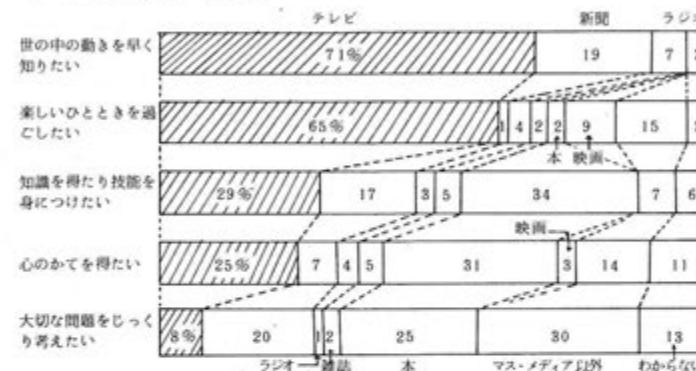
る。

表4の家族団らんについては「充電させた」「薄くした」「テレビとは関係ない」と3分されている。

表5「人前で話したり、歌ったり」ということについては、61%の人が「そう思う」と答えている。テレビが人前での発表能力を高めたと考えている人が多いことがいえる。

表6の「頭のきりかえ」については「そう思わない」人の方が、「そう思う」人よりもやや多くなっている。

■マス・メディアに対する評価



※マス・メディアとは何か？

大衆に情報を伝達する手段・方法

上のグラフからテレビに関してだけ意見を述べると、「世の中の動きを早く知りたい」という速報性と、「楽しいひとときを過ごしたい」という娯楽性を多くの人々が期待している。

「たいせつな問題をじっくり考える」ということは、多くの人々はテレビに向いていないと考えている。このことから、テレビを見ながら勉強することは不向きであると考えられる。

さきほどの(4)の表で60才以上が割合テレビを見ていないことは、「心の糧を得られない」ためではないか。しかし、一人暮らしの老人にとっては、孤独から救ってくれるものでだろう。

40・50代がよくテレビを見ていることは「世の中の動きを早く知りたい」「楽しいひとときを過ごしたい」ということに重点を置いているからだと考えられる。

■日本人のテレビ観

「ふだん、テレビについてどう思いますか」という質問に対して、次のような結果が得られました。

	そう思つ	そう思わない	どちらとも思ふ	わからない	わからぬ
テレビがついでないといふ、何かもうたりない	53.4	42.7	3.1	0.9%	
テレビを見ていって、他の人も自分と同じなんだなあと思う	57.4	33.0	6.8	2.8	
テレビを見過ぎていると思う	26.9	69.1	2.7	1.8	
テレビを見ていれば、自分で直接見たり、聞いたりしたように実際にことが分かる	75.7	17.8	4.4	2.1	
テレビは日常生活のわざわしさや、いやなことを忘れさせてくれる	59.3	33.7	5.4	1.6	
テレビはいわば家族の一員のようなものだ	64.0	30.1	4.4	1.6	
テレビはこれまでの自分の成長に役立ってきた	53.3	35.4	8.7	2.6	
自分のもの見方や感じ方がテレビに引きずられている	20.4	70.5	6.5	2.6	
子供に悪い影響を与えてるテレビ番組が多い	50.9	36.3	9.6	3.1	
テレビは家族の話し合いのさまたげになる	21.0	72.1	5.3	1.6	

最初の「テレビがついでない」とものたりない」で「そう思う」人が約半分いるということは、テレビをつけっぱなしの家庭が多いといえるのではないか。しかし、それでも「テレビを見過ぎている」と思う人が少ないということは何を意味しているのか分からない。

親がよく「テレビを見るな」と言う。「子供に悪い影響を与えてる番組が多い」と思う人が半分以上いるということが、この声の根柢になっているのであろう。

「テレビはいわば家族の一員のようなものだ。」に答えて、「そう思う」とした人が、64%もいることから、テレビが生活の中に大分浸透しているといえる。

★番組種類別比率



娯楽はたしかに多いけれども、教育・教養に関するものは35%と割合高い。割に番組を楽しみと教養・教育とにうまく分けていると思う。

報道が大分少ないのには驚いた。

(7) これからのテレビはいかなるものになるか。

テレビの普及率は約100%、飽和状態になっているといつてもよい。だから〔2〕の項目で調べたように、技術面での向上となるであろう。(〔2〕は省いてあります。)

自国番組だけでなく、宇宙開発が進んでいるから、これからは他国番組も見られるのではなかろうか。

IV まとめ

テレビの普及率は、カラー・白黒テレビを合わせると100%になる。

テレビの普及は、労働時間の短縮・家事の合理化が、テレビ視聴時間を増加させてきた。人々は朝のテレビを毎日のように見ることによって、その1日の始めに、必要なニュース、情報を接するという習慣を形成していった。

主婦の場合には、日中の番組編成にあわせて自分の生活時間のパターンをつくってきた人々が少なくない。

このように、テレビは家庭に入りこんでいる。

テレビは、情報を得る最高の手段であることが分かった。人々に政治や社会に対する考え方
に影響を与え、娯楽番組やスポーツ番組によってストレス解消を行って、明日への生活の原動
力にもなっているのであろう。教養・教育番組によって、生活内容を充実させている。子供か
ら大人に至るまでテレビは生活の一部であり、家族の一員のようなものである。やはり、テレ
ビはいいものだ。

V 感想・反省

資料の少なさには大変時間がかかり、困った。調べてみて、よその家も、我家もテレビをよ
く見ることについては、同じだなとつくづく思った。テレビは生活に、本当に密着したものだ、
ということをよく分からせてくれた。これから、テレビはどう進歩していくか、大いに期待し、
楽しみにしている。

僕にとって、テレビという身近なものをテーマに選んだのがよかった。

≈参考文献≈

「社会とマスコミ」

N H K 社会科資料1985

N H K

「図説・社会とマス・コミュニケーション」 山本明・藤竹暁共編 N H K ブックス